北斎漫画十一編

畫論に凝て筆法ところを求め医業正しく是の
如くなるを老し古人の説を活動し疾哉
全治さし良医なる人我を療す畫人も亦然り
古法は傳縄哉然けれども筆を写すべき許しく哉
画きてくる見ん画るを上手なりとも古人の法を人去後
独此翁のみとめくう派を描き筆法は五十年来
画之時風骨難致の画道を嫌ひて山の雲のかわちを

知らぬ絵に似たる猿とせしは真とも称せられて先生戯写の筆に一家を画道を開けり往て文化枝折の手より生ずる者も筆に此の御手にならしたく画かる者既に十巻刊行なりしを梓人さへ館主は雲霧斎主人にあり猶嫁云へ筆を遂に遍く漏さる我梓のこまでよ此巻来ぬ嵩編を次で廿編をまで全部と云まで ことをなせよはりたる侍孝孫の若きが第に勝りて尤興ある絵本になん

柳亭種彦

漫画

乾
天
坤
地
艮
山
坎
水
画此起り
天より
山へ
地へ
水より
周の文王

芦屋道満
易術を競ふ
安倍清明

辻占（つぢうら）

ふなとさへゆふけの
神にものとへハ道ゆく人よ占正にせよ

哥占（うたうら）

是ハ葛原法母
ならひおのりく
野らね猫の
今ハ戦れて
あたりう垂乃中

度會（わたらひ）の太夫（たゆふ）なり
とのことあり

鶏犬の声に吉凶を知る

勝敗

二王のぬりあげ
負あえ編

天人のでんがくをせ
平の忠のり 立役

て狗はむかえ
ぎをんの大とりいびる

玉手箱乃まちがひ

下部のおくびやう

つきやは
をまろう

大宴
相撲使
角觝の編
横綱
御許
谷風
梶之助

がくや
どうまへ
しめる
しこ
ふむ

しろうとすまう
まへすまう二ばんどり
はまどり

よびだし奴

へやいり
三役
立合

さぎすもふ
三尺すもう

とらけん
拳の角力

つゝもん
唐人拳
イーシロウ
ハシウ
ホヲウ
ヘエイトン
チイヒ
リウヽヌウ
ヌウワフ
アカアヒ

羅漢舞
その次ぎは
らァかんは
こやつてさァ
こちれて
ごうしてさァ
こまり

里田
山家ノ田

山田
水田

山の縁
里畑
山畑

伐木溪を下す

山中(さんちう)の時雨(しぐれ)

安志尾の裏山
庚申山猿が浄土
二王石

臺石
自然の石橋
裏見ガ飛泉

猪伐四を覗う
同
高を覗う

猟師
雉子笛

口薬入
切火縄
胴薬入
鳥口
玉袋
火縄

黐にて烏をとらふ
カラーイホウヘル
漢獵師
切火縄

猛獣を伐の図
火歩槍

海魔
當國の獵人大鳥を

弓弭

似西洋銃
海魔安

韃将似雙穴
短炮明兵寸

雙穴之短炮

火方脊面

石挾

石

脊面之形

火方面

火門

側面全圖

引金

側面
裡面之形
裡面ノ二

刀八毘沙門天

略画の編

鳳

王

層輪塔（そうりんとう）

三才鳥栖（さんさいとりゐ）

五
一
夫

北斎画譜

彩色入 全三冊

文筆は假て發揮との八字詞実に過たるも多し。されども前北斎為一翁は先年江府にありて画名海内に轟きつゝ千里に響く雷霆のごとし。其実形は見んそハいふに文るとも詞足るべし。今翁の画譜は先て様本に委し。筆形は写すもさらに無情の山川草木もおのづから画中に霊妙を示し、況や人物に於ては変態神をあらはし、心詩に及ざる処の奇妙は実に故人いはく画中に詩あり詩中に画ありと。和歌連俳に遊ぶ輩も此翁の画を見て其趣向の案をめぐらすべく、并に詩のこゝろなんまして画を学ぶ人ハ千種万般の手本とすべし

狂画神事あんどう

彩色入 全一冊

此画状ハ神仏祭事の附飾りの幟あるひハ社内寺中までもある灯籠行燈に、そんの工夫を主意として雪月や彼川柳点の狂句深く人情に通せしむ。あらはして又ひ先にて北斎先生例乃有職古実を交へて唯俗眼より見あきを要し、書を後にあらず手を擬とし